



2011年夏、逗子海岸にて 写真=Tochi Sato

## ムッシュのいた湘南

誰とでも笑顔で付き合ったかまやつひろしさんの思い出

文=ジョージ・カックル

湘南とムッシュ。あまり縁がなさそうに見えるが、実はこの15年ほど、ムッシュことかまやつひろしさんは、よく湘南を訪れていた。きっかけは2001年7月6日。僕の息子が横浜の病院で生まれた日のことだ。生まれたばかりの息子とワイフの無事を見届けてから、僕はチャイナタウンに向かった。元ゴールデン・カップスのエディ藩が経営する中国料理店で食事をするムッシュを迎えに行った。この日は横浜のライヴハウス・サムズアップで初めてムッシュが演奏することになっていた。

この企画は、当時、僕がプロデュースしていた鎌倉在住の外国人バンドと一緒にやったら面白そうだと、ムッシュと僕で盛り上がりつつ実現した。とはいえ、彼らだけだと時間がもたないと思い、ジャム・セッションができる鎌倉のブルーズ・バンドと若手ギタリストも呼んだ。店に着くと早速セッションが始まった。エディは壁にかかった古いギターを手にとり一緒にステージが上がった。ポロポロのギターで深いブルーズの音を出しまくった。それまでもムッシュは湘南に遊びに来てライヴをしたこともあったが、この夜、改めてムッシュの湘南のチャプターがスタートした。これを機に湘南エリアの様々な店でライヴをやるようになったんだ。横浜のサムズアップに始まり、金沢文庫のザ・ロード・アンド・ザ・スカイ、鎌倉の小さなブルーズ・バー・ティピティーナ（現在は閉店）、七里ヶ浜のレストラン・JIMONKS（現在は逗子）では海見えるテラスで、そして丘の上から海を望むライヴ・レストラン・サーファーズ。

するとその警官は「僕もかまやつさんのファンなんですよ」と言ってきた。もちろんライヴを続けることができたよ。ちなみに、ここは店員の女の子も、カウンターの前に飛び乗ってノリノリで踊る。ある時、僕がこんなノリが東京にもあったらいいのにと言ったら、ムッシュはこう言ってきた。「東京にはないから、ここがいいんだ」ってね。

僕とムッシュとの思い出のひとつに、アメリカでの滞在がある。そもそも僕とムッシュが知り合ったのは80年代半ばだ。古くからの友人を通して、ムッシュがインディーズ・レコードをつくりたいと言っているからと紹介された。その友人とは日本が誇るギタリスト、今剛だ。彼らのバンドはONE NIGHT STAND BROTHERSといい、サンフランシスコのスタジオで、たった2週間で1枚のアルバムを作った。僕の役割は彼らを見守り、レコーディングをスムーズに進めることだったけどね。それからというもの、ムッシュは僕が当時住んでいたサンフランシスコの家によく遊びに来た。サンフランシスコは夏でも朝夕は寒い。でも彼はコートを持たず、僕のブランケットを肩にかけて外出していた。ムッシュは「もし日本人に見られたら、きつと俺が売れなくなつて、アメリカでホームレスになつたと思うだろうな。おもしろいなあ」と言つて、ずっとブランケットを羽織っていた。そんなある日、カリフォルニア州の中ほどにあるサンタクルーズというサーフ・タウンに遊びに行つたときのこと。町をオープン・カーのカルマン・ギアで走っている

江ノ島の展望灯台では夏のクソ暑い日にステージに立った。鎌倉の海の家・エイジアでも海を眺めながら、砂まみれで歌つた。ムッシュは湘南のサーファアのなかでも、ひと際ぶつ飛んだワイルドなサーファアたちに興味を持った。数年前に亡くなった日本のスケート・ボード界の異端児、デビル西岡や逗子の大神所サーファアの関本ソウイチロウ。ムッシュにとって、今まで自分の周りにいなかったタイプだったんだろう。そのなかにはテストライダーズというバンドもいた。彼らは湘南のサーファアの世界では誰もが知るバンドだ。ムッシュは彼らのロックンロール・スピリットが気に入って、ストーンズみたいなグルーヴがあるとよく言っていた。なかでもヴォーカルの田中俊人とは本当に気が合った。彼と話したり、彼のバンドと組むライヴは、ムッシュにとつて新しい風のようなだった。チャンスがあれば彼らと共演し、サイド・ギターを弾いて楽しんでいたいよ。

ある時、ザ・ロード・アンド・ザ・スカイでテストライダーズと一緒にライヴをする予定があった。前座がはじまると、ムッシュは音も聞かずにギターを持ってステージに飛び乗り、ギターをアンプに差し込んだ。そう、出番を間違えてしまったんだ。それに気づいたムッシュは、笑いながら、そのバンドの曲にサイド・ギターをつけていった。彼らも驚いた顔をしながら演奏を続けていた。まさか俺たちのステージにムッシュが！ってね。またライヴの音が外に漏れて近所の人に通報され、警察が様子を見に来たこともあった。それに気づいたムッシュは、すかさずスパイダースの△バン・バン・バン△を歌い始めた。



2016年5月7日、サーファーズでの湘南最後のライブ。THE IZAWA BAND、"タッド"マエダと  
写真=Bruce Osborn

っていた。サーファーはもちろん、海が好きな家族連れ、水着姿のファンやお姉さんたち。その日出演のメンバーは、ムッシュ、テストライダーズ、鎌倉のブルース・バンド・THE IZAWA BAND、"タッド"マエダとアリサ・サフ。タッドは「数年いつもムッシュとともに東京から来ていたギターリスト。アリサはアメリカ仕込みのロック・シンガーで、ムッシュとずっと一緒にツアーを回っていた。この日は天気が良くて、気持ち

と、ふたりの日本人の女学生が「あ！ ムッシュだ」と彼を指さして叫んだ。その時、ムッシュが「ちよつと車を止めてくれない？」と言うので、彼女たちどころまで車をバックすると、ムッシュはそのふたりに声を掛け、30分ぐらい話していた。そのあと、彼はこういった。「ああいう人たちがいるから、俺は今のような生き方ができるんだ。ファンは大切だよ」。ムッシュは誰にでも優しく対応していた。少々変わった人とも、笑いながら付き合った。湘南のライブは出演者と観客のボーダーがない。観客と一緒に過ごしたものだ。

湘南のライブではあまり自分のヒット曲を歌わなかった。＼ゴロワーズを吸ったことがあるかい／＼バン・バン・バン／以外はあまりやらなかった。好きなロックやブルース、カントリーの曲を歌っていた。誰かが彼のヒットをリクエストすると、歌ってる途中で「もう歌詞を忘れちゃったよ」と言っていた。

七里ヶ浜のJIMMONKSでも、ムッシュはライブをしたことがあった。そこではアメリカのシンガー・ソングライターのマーク・キヤスと二人だった。アンプひとつ、小さなPAでもムッシュは文句を言わずに楽しくライブをやる人だった。一度、七里ヶ浜のプリンスホテルでブレッド&バターのライブに出た時も、一本のギターで弾き始めたら、アンプから音が出てこなくなってしまった。普通なら止めると思うが、ムッシュは「俺はここでやめられないよ！」と、アンプなしでエレキ・ギターを弾き続けて、素晴らしいセットを完了した。音楽を愛するムッシュらしいひとコマだ。

ムッシュは湘南に来る時はマネージャーの大野君と二人のこともあったが、時々ギターを持って、一人で電車に乗って来た。そのために、運びやすい、ヘッドもない、小さなスタインボーガーを持っているんだとよく言っていた。

ムッシュの人柄がわかるエピソードに、こんな話もある。数年前、当時はまだ海の家だったサーファーズで、僕のインターFMのラジオ番組(レイジー・サンデー)の公開生放送があった。ムッシュはその生放送と夜のライブに出演してくれることになっていたので、地方の仕事から直接向かうということだった。朝早い新幹線に乗ってね。でも、番組が始まって来ない。本当に来てくれるのか？ 間に合うのか？ なかなかムッシュは現れない。そして、やっと顔を出してくれたのが番組終了直前。駆けつけたムッシュにマイクを通して言った言葉は「ハイ、ムッシュ、登場！」。対して彼が応えられたのは「ハイ！」。たったひとりでその日の番組は終わった。ムッシュは大笑いだったよ。のちのち、笑い話として、ふたりでよく思い出したものだ。こんなふうに、ムッシュはなんでも大きな器で受け取り、笑いに変える。目の前に起こることを楽しんでたんだ。誰かがステージで喧嘩しても笑ってた。経験も豊富だからね。そして湘南の音楽好きの間では、次第にムッシュが湘南の音楽シーンに在ることを、ごく普通に受けとめるようになっていった。

ムッシュが最後に湘南でライブをやったのは、昨年(2015年)の5月7日のサーファーズだった。この店にはいろいろな海好きが溜まっていた。でもムッシュはあまり元気がなくて「今日は彼らと2、3曲歌うよ」と言っていた。それなのにテストライダーズがステージに乗ると、ムッシュも向かった。ステージに乗ると元気になり、数曲歌ってから休憩に戻ってきた。最後にTHE IZAWA BANDと"タッド"マエダが演奏を始めた。すると疲れ切っていたはずのムッシュがまたギターを握った。天から何かが降りて来たように、体にパワーがあふれ、オーラが出てきた。疲れた身体と顔がどこかへと吹き飛び、生き生きとした表情になった。1曲が終わると、次の曲、また次の曲。1曲ずつ元気が出てきたように見えた。そして最終的には3時間ぐらいやってしまった。ムッシュの笑顔とは逆に、バンドはヘトヘトだったけどね(笑)。

ムッシュは会うたびに、アメリカのことをいろいろ質問してきた。音楽やミュージシャンの話。ある日はアメリカの政治、歴史、ニュースで話題の人。例えば、トランプや女子インディーズ・カー・レーサーのダニカ・パトリック。僕の日本語は単語が足りないから、難しいことでも簡単な言葉で説明する。だから、わかりやすいとよく言われた(笑)。ムッシュとはもうこんな話はできない。でもムッシュの笑顔はいつだって思い出せる。こうやって原稿を書いている日は夢に出てくる。そして彼の音楽はいつまでも僕の耳に、心のなかに残るだろう。

I hope you are still playing your rock and roll. Thank you for all your music you shared with us.